【入選】

横浜線　各駅停車　東神奈川行き

国際日本学部　国際文化交流学科2年　三好　里沙

その光は、眩しすぎました。

２０１８年、冬。名門の高校名が刻まれた、ウィンドブレーカーに身を包み、背負いきれない重さのリュックを背負った私は、もう限界でした。時刻は夜の二十二時。明日も始発電車で学校に行き、体育会系の指導を受ける。カフェインを一気に摂取して、授業と部活を乗り切る。眠い目をこすってそのまま塾へ足を運ぶ。明日の授業についていけるのか、不安を抱えながら、家へと向かう電車に乗る。待ち受けるのは、重度障害者の弟と要介護の父方祖父。疲れ切った母に、疲れ切ったあなた。黄色い線の内側に居た私にとって、その世界は「絶望」でした。

大きな車輪の音が聞こえてきます。これ以上の刺激を受け止めきれない状態なのに、その光は暴力的で、どこかミステリアスでした。暖かくて、疲れた身体を引き寄せる力をもっています。もう、内側になんていなくていい。もしかしたら「希望」だったのかもしれません。

肌に突き刺さるような冷たい空気が、皮肉にも動きを鈍らせたのでしょうか。今となっては、緑色をした車体の残像と、大きなクラクションの音、そして横殴りの風のみ、記憶として残っています。

あのときの私が、あなたに抱いていたのは「憎悪」でした。どうして親戚、家族の意見を聞かずに介護を引き受け続けたのですか。どうして家族が壊れかけていたのに、動いてくれなかったのですか。どうして高校生の娘に対して軽率な言葉をかけ続けられたのですか。どうして自分を捨てるのですか。

「おじいちゃんはうちで引き取る」

そう言ったあなたは直ぐに自分のものを捨て始めました。大切にしていた映画のＤＶＤ、ＣＤ、旧来の友人からもらった手紙の数々。次から次へと処分して、祖父の介護ベッドのスペースを作り始めましたね。ぽっかりと空いてしまった、あなたの部屋。名門に合格した娘の進学を喜びながら、これから始まる壮絶な日々を誰にも相談しなかったあなた。その後ろ姿は、どう頑張っても見ていられませんでした。

高校生活が始まり、部活も勉強も高いレベルを求められ続ける生活を送ることになった私。介護、障害者の面倒、パートと、力いっぱい両立を試みようと頑張った母。次第にストレスが蔓延する自宅で、必死に生き抜いた弟。出世という名の責任と、一家の大黒柱を背負い、やつれていったあなた。私はあなたにこう言うようになりました。

「一度親戚と、介護負担について話し合った方がいい」

「お母さんも弟も私も、今の家の環境に限界が来ている」

それを聞いたあなたは言います。

「自分が一番面倒見ていないくせに。そういうこと言う娘になってしまったんだな」

あなたらしくない言葉が、そうして次第に増えていきました。私らしくない気性の激しさが見られるようになりました。歯車が狂うとはこういうことなのでしょう。今でも思い出すと、息が上手く吸えない感覚が蘇ってきます。

２０１８年、夏。遂にあなたと話さなくなりました。ボロボロと崩れていく「父親」が私の中で死んでしまったのです。抜け殻のような生活を同じ屋根の下で送ることに、吐き気を覚える毎日でした。多分あなたもそうだったことでしょう。口を開けば介護費用の話に、責任所在の話。更には娘にするようなことではない発言まで。何があなたをそうさせたのか、多分それは私なのではないか。とにかく苦しい毎日でした。

結局、部活も勉強も中途半端に高校生活を終え、とりあえずの進路を私は歩み始めました。唯一明確な意思のもと実現・実行したのは、「家を出る」ということです。

あなたの知らないところでこの二年、私は、あなたや母以外の人に育ててきてもらいました。劣等感・憎しみといった醜い姿をどう受け止めるか、ときに血反吐が出るほど痛みを伴いながら、この二年過ごしました。

そして今、伝えたいことがあります。

今いる、私の世界は、とても美しいです。

きっかけは、大学の先生でした。某国内最難関大学を出ているその先生に、こんなことを相談したのです。

「四・五十代の男性が、私は苦手なんです。考え方も話の内容も、どうしてそうなるのか分からないのです。だからこそ、先生はその年代なのに、イレギュラーで不思議です。」

その先生はこう言いました。

「僕たちの世代は、価値観が二転三転した世代なんだ。バブルで踊り狂う大人たちを学生時代に見ながら、バブルが崩壊したあとの現実を、社会人として受けた世代。君に一つ言葉を送ろう。『罪を憎んで人を憎まず』だよ。」

「罪を憎んで人を憎まず」この言葉の意味を、私はよく飲み込めませんでした。しかしその数日後、あなたとは真逆の生き方をしている、五十代男性とお話させていただく機会がありました。ですから、こんなことを聞いてみたのです。

「先生は、バブルが弾けた頃に社会人を迎えたと思います。周りには安定志向が漂い、あまりいい空気感は流れていなかったはずです。どうして先生はそんな中でも今に至るまで、芸術一本で挑戦し続けられたのですか。」

そうしたら、このような返答をされたのです。

「僕は偶然周りに同士が沢山いたから、自分のやりたいことを突き詰めても冷たい目線を浴びることはあまりなかった。けれど、昭和のいびつな空気が蔓延していたのは事実だよ。男は一流大学出て稼ぐのが当たり前、女は三十過ぎたら半額だ、なんて普通に広告にながれていたくらいだからね。そういう雰囲気・価値観の中で生きなければならなかった。だからこそ、君のお父さんのように、安定した仕事に就いて生きてきた人からすると、僕らのような人間は嫉妬の対象だと思うね。だけどね、里沙。僕らのような人が、君のお父さんのような人をどう思っているか、知っている？」

私は「軽蔑する」だと思っていました。けれど、先生はこういうのです。

「かっこいい、だよ。その環境の中で、自分なりに最善を尽くした。少なくとも自分が頑張って作ったお金・時間を注ぎ込んで、こんな素敵な十九の娘さんとハンディキャップを負っている息子さんを育て上げた。生きてきた時代の中で曲げなければいけないもの、捨てなければいけないものあったと思う。僕のような人間も、子供かキャリアか、でキャリアをとってきた訳だし。」

今から述べることは、出来過ぎた解釈かもしれません。けれど、私はこの言葉までたどり着いてやっと分かったのです。あなたは父親である前に人間であったということを。私と同じ十九のときがあって、社会とどう向き合うか悩む時期があっ

て、「絶望」があって、その中でも生きてきたのだと。

横浜線に乗っていた高校時代に対して、今は東急東横線によく乗ります。武蔵小杉・自由が丘・中目黒・渋谷。開発が進んで小奇麗と化した街並みを車窓からみて思うのです。三十六年前、あなたが私と同じ年だったころ、この車窓はどう見えていたのかと。街並みも空気も考えることも、何もかも違っていただろうあなたのアイデンティティを想像するのです。

そうすると、涙をこらえることが出来ません。なぜなら、あなたとのいい思い出が次々と蘇るからです。覚えていますか、私が小学生のときの、健民祭。同じマンションの仲のいい友達同士で、子供ながらに競技観戦を楽しんでいたとき、あなたは私の分だけでなく、友達全員分のお菓子とジュースを買ってきましたね。あとで母に怒られることを分かっていながら、まあいいじゃないか、と豪快に笑うその姿は、小さいながらに憧れでした。

どうしても手がかかる弟に付きっきりの母。だからこそ、あなたと過ごす時間が長かった。でもその寂しさを忘れるくらい、あなたは私と向き合ってくれた。ドッチボール大会で優勝したときの夜、仕事で疲れていたはずなのに全力で喜んでくれた、中学受験に失敗した夜に、そんなの人生において大したことじゃないと言ってくれた、夜道が怖くて塾から帰るのを怖がる中学生の私を、いつも駅前で待っててくれた。例え時代の中で曲げなければいけない価値観があったとしても、垣間見える「かっこよさ」を子供ながらに汲み取っていたのだと思います。だからこそ、あなたが私の中でボロボロと崩れて死んでしまったとき苦しかったのだと思います。大好きだったから。

今の私があなたに抱く様々な気持ち、それはとてもきれいごとではまとまりません。それくらい、今の複雑な感情は、あの壮絶な時期に傷となり刻まれたからです。だから、よくある感動ポルノの結末のようにあなたと関わることは今後ないでしょう。

ただ「罪を憎んで人を憎まず」の意味が分かった今、私は、三好里沙という人間は、なんとか前を向いて生きています。自分の人生より優先して守り抜いたそれは、世間にとっては名もなきあなたが作った「美しい」世界で、今生きています。

今日も明日も、きっとあなたはいつも通り職場に向かって仕事をしていることでしょう。皮肉にも、私の絶望の象徴である、横浜線・各駅停車・東神奈川行きに乗って。

あなたにとって、消した、あるいは思い出したくない、あなたの好きに忠実だった「あなた」を、私は一生忘れません。無残に自ら捨ててしまった、好きだった映画もCDも大切な友達の手紙も。

だからどうかお元気で。里沙も里沙で自分の人生を歩みます。

近いようで一番遠い、父へ。

娘より。

コメント

上記を読んでいただくとお分かりいただけるように、自分はこのような賞に応募できるほど大した能力、例えば文才であったり表現力であったりを持っておりません。また、この作品の対象である本人がこれを見つける可能性も低いです。ですが、折角のこの「書き残す」という機会を使って、自分の内面を叩きつけてみました。もしこの大会の本望でなければ申し訳ございません。

ここに描かれている今の私が「正しい」とは思っておりません。多分、これは二十歳になっても、十年経っても二十年経っても正しいにはたどり着かないし、人生ってそういうものなのかなと、小娘ながらに思っています。

ですから、もし「もがき苦しむ等身大の私」がこの作品から読みとっていただけたのなら、これほどにも嬉しいことはありません。

最後に、途中泣きながら書き上げたこの作品を通して、いい経験をさせていただきました。ありがとうございました。